

AI と社会学の未来

——人工知能は〈社会的なるもの〉をどう変え、社会学の方法を

どう刷新するのか？——

※ 以下の予定で進行します。フロアからの質問は、「質問用紙」を休憩時に集める方式です。ご協力
よろしくお願い致します。

■進行予定 = 2019年10月6日, 於: 東京女子大学 24202 教室 =

14:10-14:20 導入 8 分 (柴田)

14:20-14:45 井上報告 20 分 (発表直後の質疑応答は無し)

14:45-15:10 瀧川報告 20 分 (発表直後の質疑応答は無し)

15:10-15:35 若林報告 20 分 (発表直後の質疑応答は無し)

15:35-15:50 白山コメント 12 分

15:50-16:05 大黒コメント 12 分

16:05-16:25 休憩 20 分 (16:05~質問用紙回収)

16:25-17:25 フロアを含めた総合討論 60 分

17:25-17:40 登壇者 (5 人) からの最終コメント

■企画趣旨文

担当研究活動委員

樫田美雄

柴田 悠

出口剛司

レイ・カーツワイルは『ポスト・ヒューマン誕生』(2005 年)の中で、インターネットによって汎
用型 AI が相互接続することにより、人間の知能を超える時代が近く訪れ(特異点=シンギュラリテ
ィの到来)、さらに人工知能がナノテクノロジーと遺伝子工学という他の科学技術と結合することによ

り（GNA=遺伝子工学・ナノテクノロジー・人工知能の登場）、人間と社会の在り方が抜本的に変化すると論じている。またエリック・ブリニョルフソンとアンドリュー・マカフィーの『機械との競争』（2011年）は、こうした技術的可能性にとどまらず、やがて知的職業の大半が人工知能の普及によって失われるといった現実社会に起こりうる未来予測を展開している。

こうした「未来学的な言説」が流布する背後には、デジタル革命以降のさらなる IT 技術の進展、とくに機械学習機能を備えた人工知能の開発といった社会的現実が存在している。たとえば2016年、人工知能・アルファ碁（特化型 AI）が韓国の棋士イ・セドル九段に勝利したことは、人工知能の飛躍的進歩を表す象徴的出来事であった。また自動運転技術の運用、人工知能を備えた人型・動物型ロボットの開発と労働・福祉の現場への導入、アマゾンの購入履歴に基づく広告表示機能、各種ポイントカードを通じた生活履歴の蓄積（ビッグデータの出現）、さらにはイギリスの EU 離脱を巡る国民投票、アメリカ大統領選において顕在化したソーシャルメディアの効果（フェイクニュースの登場とポスト真実の政治）という「現実」があるといえよう。たしかにこれらは、われわれの生活世界、社会システムの双方に大きな影響をもたらし始めているといえるだろう。その一方で、人々が「現実」から「未来」を予想していく推論部分に関しては、社会学的に疑義のある因果論や存在論が前提となっているようにも思われ、AI をめぐる議論の全体に対しては、社会学的な洗練が求められているようにも思われる。

本シンポジウムの課題は、まずは、高度な人工知能の発達とそれに伴う技術革新が現実社会及び社会学の方法にどのような変化を起こすといえるのか、についての検討である。学祖オーギュスト・コントによるスローガン「予見せんがために見る」にもかかわらず、その後の社会学の歴史は、むしろ、未だ到来せぬ未来に対し自らを戒め、いわゆる「近代市民社会の自己認識」に徹してきた感がある。それに対し本シンポジウムは、「AI と社会学の未来：人工知能は〈社会的なるもの〉をどう変え、社会学の方法をどう刷新するのか？」と題し、人文科学と社会科学、文系学問と理系学問の複数領域にまたがる専門家を招き、新しい人工知能や機械学習の登場が社会学の対象である「社会的なるもの（the social）」〔社会的行為、社会関係、社会集団、社会構造、社会変動〕にいかなる変化をもたらし、またそれを対象化する社会学の方法をどのように刷新する可能性があるのかについて議論する。そのうえで、上述の議論が、「社会学の自己認識」を更新する必要に（本当に？）繋がるのかどうかについてまで、論じあげていきたい。

登壇者は以下の5名である。まず、人工知能や機械学習に精通し、経済学の観点から人工知能がもたらす産業・労働世界、所得・分配構造の変化の解明に取り組んでいる、経済学者の井上智洋氏（駒澤大学）、理論社会学を専門としつつ計算社会科学を社会学に導入し、最新の統計学を駆使してデータ分析、社会学方法論の刷新をめざす瀧川裕貴氏（東北大学）、都市社会学の観点からサイバー都市の可能性について論じ、さらに社会学が未来を語る意味を追求してきた若林幹夫氏（早稲田大学）、に順次報告をお願いする。さらにコメンテータとして、個人の振る舞い、集団における個人、環境との相互作用に注目しながら、複雑系としての現実社会が生み出す諸現象の分析、予測、制御技術の研究に取り組む白山晋氏（東京大学）と、グーグル、ビッグデータ、人工知能がもたらす情報社会の変化に取り組んできた哲学者でルーマン研究者でもある大黒岳彦氏（明治大学）をお迎えする。

「社会学の未来」に無関心であってよい社会学者はいないはずだ。本シンポでは、登壇者の過半を非会員からお迎えしており、その代わりにフロアを交えた（社会学的）議論の時間については十分に取りたく思っている。会員諸氏の積極的な討論参加を御願したい。